でも、今はなんてことはない。こんなに⑥そばにいるのに。
ちがう。こんなにも⑦そばにいるからだ。
「お父さん、泣いてるの？」
「泣いてるわけないだろう」
「でもさっきから鼻すすってるよ」
「お父さん花粉症なんだよ！」
ぷっ、とふきだしたのはお母さんだった。つられてわたしもちょっと笑うと、お父さんはもごもご言いながらゆっくりと腕を下ろした。
静かな道の上、むぎゅっとひとつになっていたかたまりが解けていく。
お父さんは涙目で、ちょっとバツの悪そうな顔。お母さんは必死で笑いをこらえた顔をしている。そしてふたりともとても優しい表情になって、いっしょにわたしを見た。
「帰ろう、星」
片手ずつのばされたふたつの手のひら。小さいころを思い出す。出かけるときはいつだってこうして、わたしは大きなふたりにはさまれて歩いていた。世界で一番しあわせなのは自分だって a ウタガいもしなかったあのとき。大好きなふたりの間こそが自分だけにゆるされた⑧特別な場所で、そこが世界の中心なんだと、心の底から信じていた。
そうじゃないと今は知っている。世界はもっと広くて、きたなくて、不確かなものばかりで。自分はいつだってはしっこの方にまぎれている。
それでも、そんな今になっても。変わらないのは、やっぱり、このふたりの真ん中に立つのはわたしだけの特別なんだということだ。
「うん、帰ろう」
夜でよかった。高校生にもなって両親と手をつないで歩くだなんて、さすがに人に見られたらはずかしすぎる。それでも手ははなさなかった。
お父さんは、もうそんなに見上げなくなった。お母さんは、いつのまにか背をおいこしていた。変わってしまったんだなあと思う。変わっていくんだなあと思う。いつまでも同じままじゃいられない。世界は b コクイッコクと昨日を消して、新しい明日へと向かって行く。
でも、変わり続けながらつながり続けるものもある。わたしがわたしであるように。
姿が変わって心が変わっても、それだけは変わらない確かなもの。
だけどあのときと同じだ。わたしの手が成長しても、つないだ手はやっぱり大きくて、それでいて温かい。安心できるぬくもり。心から信頼できる場所。大切な、家族のいる場所だ。

家に帰ってから、お父さんとお母さんにこれまで思っていたことを少しずつ話した。いつからかけんかをすることが多くなったふたり。どなり声を聞くたびに心臓がぎゅっと痛むから、目を閉じて耳をふさいで、布団の中で小さく丸くなっていたこと。昔のようにもどってほしいとずっと思っていたこと。だけどもどりはしないって、本当はわかっていたこと。もうわたしはいらないんじゃないかって考えたこと。自分のことが、とてもきらいだったこと。
話したいことはなかなかまとまらなくて、とぎれとぎれなわたしの言葉は伝わりづらかっただろうと思う。自分でも何を話してるのかよくわからなくなったり、口に出しながら〝わたしこんなこと思ってたんだ〟って、考えたりなんかもした。